

---

# 君に会えて

健史

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

君に出会えて

### 【Nコード】

N4330D

### 【作者名】

健史

### 【あらすじ】

緒方祐次この物語の主人公だ。彼は難病に罹ってしまい愛する人由比との別れを決断するのだが・・・二人の切なくてあたたかいラブストーリー

## 1章

カーテン越しにやさしい陽射しが降り注ぎ、時々冷たい風が入り込んでくる。

季節はゆっくりと冬の準備を進めようとしている。

最近よく夢を見る、僕が元気だった時の夢、愛している人の夢・

だから夢の中はとても居心地が良く幸福な気持ちで居られた。

現実に戻った時にはそれが本当の事だったのか、

妄想なのかも検討がつかなくなってしまいとても悲しい気持ちになり涙が止まらなくなりそうな気がした。

だから、僕は記憶をたどり少しだけでも覚えておく事にしている。

「ピピピピピ・・・」

心地よい夢の中で何処からか聞きなれた音が耳に入ってくる。

僕は重い目を擦らせて目覚まし時計の時間を確認する。

「やばい！また寝坊だ！」

これが、僕のいつものパターンだ。

昔から朝は強いほうじゃない、というより自覚が足りないのだろ  
う。

25歳にして、ちゃんとした定職に就こうと職業安定所で見つけ  
た、IT関係の仕事に就職して早1年目になる。

いままで、工場や飲食店、建設業と色々な仕事に就いたのだけれ  
ども、どれも長続きせずに辞めてしまっていた。

僕の勤めている会社は、自宅から車で約30分くらいの場所にあ  
りITの会社の中では大手の企業で、はじめはここで働く事に抵抗  
があったが、良い先輩に恵まれ、仕事も、徐々に慣れていった。

こんな僕も1年ほど前から趣味でフットサルチームを作って友人  
たちと活動している。

半分が素人の集まりで、社会人のリーグや大会にエントリーして  
いるのだが、試合には、なかなか勝てず負けてばかりいるけどそれ  
なりに楽しくやっている。

仕事の帰りに、週に2度はフットサルをして汗を流し自宅に帰る。

これが僕のささやかな楽しみなのだ。

4月になり辺りはすっかり春らしくなっていた。

桜の枝には綺麗な花びらを咲かせていて、学生たちがまだ新しい卸したての制服に慣れなそうに登校している。

僕はいつものようにギリギリの時間に会社に出勤して、自分の机に向かって仕事に取り掛かる。

今月から僕のいる営業所ではなく他の営業所なのだけど、新しい部署を一つ増やした事で、その部署に仕事の事で連絡をする事が多くなった。

その部署の中で働いていた、小手川由比　彼女に恋をする事になる。

いつもの様に由比と仕事の話で連絡していたときのことだ。

「同じ会社で仕事のお話とかして数ヶ月経ってるのに、お互い顔は知らないのよね？」

と由比が笑って言った。

僕のいる会社から彼女のいる営業所までは車で1時間ほど離れていて、いままで特別行く理由も無く、顔を合わせた事はなかった。

「小手川さんは、どんな感じの人なの？」　と僕は聞いてみると、

由比は「居たって普通の女の子よ」と少し控えめに笑って言った。

確かにどんな人と聞かれて私はこんな人です。と自分の事を細かく説明する人はそれ程いる訳がないのだけど僕はついありきたりな質問をしてしまった。

今度は由比が「緒方さんは？」と聞いてきたので

僕は、背が低くて痩せていて何処にでもいそうな顔と言った。

実際本当の事で僕は背が低くて痩せているが少しコンプレックスを感じている所でもあったのだけど先に言ってしまった方が後々楽な気がしてこんな風に自分を説明してしまうのだ。

そんな僕の説明に由比は緒方さんて面白い人ですよ。

と少し笑いながら言ったので「何で？」と僕は聞き返した。

すると由比は、「だって、大抵の人は自分の事を言う時には、少しは好く言うのに緒方さんは、違うんだもん」と言った。

僕は「そうなの？」と聞き返すと。

「うん。そうだと思うわ」と言って笑いながらこんな僕に会ってみたいと言っていた。

こんな風に彼女と話しをしたのが始まりだ。

それから、何日か過ぎて仕事の関係で、彼女のいる営業所の近くに行く事になった。

今までに何度か行つて見たい気持ちはあつたのだが由比の居る営業所に行く予定も無く由比に会いに行く為だけに行くのは不自然だと僕は思っていたからだ。

「今度、その営業所の近くに仕事で行くんだよ。寄れる時間があったらいこうかな？」と僕が言と、

「緒方さん来てくれるの？」と聞いてきた。

「うん。行ける時間があればだけど。」と由比に言つただけ但当は、半日もあれば終わる仕事だ。

もしも行けなかった事を考えて少し控えめに言っておく事にした。

「じゃゝもしかすると会えるのかな？顔会わせるの初めてね！」と由比は嬉しそうに言つた。

「うん！でも余り期待して欲しくないけどね。がっかりさせたら嫌だし・・・」

「あはは！それは、お互いさまだよ！緒方さんもがっかりするかもよ！会わなきゃよかった。てね？」

由比はそんな事言っていたけど僕はそれはないと思っていた。

別に確信がある訳でも無いけれどそんな気がしていたし、どちらかと言うと僕の方が、由比の事を意識しているからなんだと思う。

数日後、仕事を終えた僕は、由比のいる営業所に向かった。

実は、いままで感じたことのない・旨くいえないけどとても不思議な気持ちになっていた。

僕だって今までそれなりに恋はしてきたつもりだ、失恋もしたし、いい恋もしてきたしSEXだって恋人のいた頃にはそれなりに経験しているつもりだ。

ただ、電話でしか知らない由比にこれから会う、そしていつものように話をするそれだけなのに、今の僕は、とても落ち着かないというか、緊張をしている。

僕だってそんなに鈍感ではない自分の事くらい少しはわかってい  
るつもりだ、これから会う声しか知らない由比に惹かれている事、  
そう思えば思うほどまるで、これから愛の告白にでも行くような気  
持ちになってしまっていた。

営業所に付き僕は、一度大きく深呼吸をして軽く事務所のドアを  
ノックした。

「トントーン！」あれ？応答がない？もう一度「トントーン！」

すると、ドアの向こうから、どうぞお入り下さいと声がした。

「こんにちは」と言いながら僕はドアを開けてみた。

事務所の中はとても広く机がいくつも並ばれている。

何台ものパソコンが設置されていてそのパソコンに向かってカタ  
カタと音を鳴らし何人かの人たちが仕事をしていた。



すると近くに居た中年らしき女性が僕に向かって歩いてくる。

「あら？もしかして緒方君？」      聞きなれた声だ！

仕事の連絡を取っているのは、由比だけでなく何人かの人達と取り合っている。

その中にいる山根さんと僕はすぐにわかった。

山根さんは、仕事の連絡をする事になってから、すぐに話し慣れた人だ。

誰にでも打ち解けるのが早い人なんだと思うし世間話をするとき話が長いのが玉に瑕なのだがとても感じのよい人だ。

「はい！緒方です。山根さんですか？」

僕が尋ねると山根さんは、

「やっぱり緒方君だ〜！由比ちゃん！由比ちゃん緒方君が来たよ！ほら〜！」

ほら！って山根さんいきなりかよ！心の中で僕は突っ込む

由比はこっちを見て軽く会釈してすぐに机に向かってしまった。

ほら〜最悪なシナリオだ！（心の中で）

僕の気持ちを知るはずのない山根さんは、電話の時と同じ調子で緒方君こっちこっちよと僕を事務所の中へ連れて行き、事務所の

人達の紹介や仕事の説明を始めた。

それから、事務所の由比以外の人たちと話が終えた後、僕は由比のいる机に向かって歩いて行こうとしたその時、気をきかしてくれたのだろうまた山根さんが、

「緒方君！お茶入れたから飲んで〜」

と言つて僕を呼んでいる！

おばさん別の事に気を回せよう！（心の中で）

「はい！ありがとうございます！」

と言つて僕は由比の方をチラッと目をやった。

由比もこちらを見ていたのか、にこりと笑った。

僕の顔に書いてあったのだろうか？由比は僕を見て笑っている

そこへ山根さんが

「緒方君冷めちゃうよ！」と呼んでいる

「はい！行きます！」

結局由比とは、ほとんど話せずに僕は、帰っていった。

## 2章

自宅に帰った僕は、由比の事を考えていた。

まだ、胸の高鳴りが治まらないからだ。

初めて会って、そして、あの時の由比の笑顔が僕の気持ちをより  
いっそう昂らせた。

どうやら僕は由比の事が好きになっている。

僕は今まで出会って恋をした人達とは少し違う気持ちだと感じて  
いた。

身体中の細胞が分泌され一つ一つがまるで喜びのダンスを踊って  
いるようなそんな気持ちだ。

小手川さんは、僕の事どう思っただろう・・・がっかりさせたか  
な？

不安な気持ちがよりいっそう僕の胸を苦しくした。

次の日、僕はいつもならギリギリの時間に会社に着くのだが、1  
時間も前に会社に着いた。

自分の机に座り、仕事に取り掛かる。僕の仕事は、基本的に外回  
りの仕事が多く、事務所内での仕事はそれ程ないのだが、僕はどう  
もデスクワークは向いていない様だ。

必ずと言っていいほど少ないはずの事務的仕事が溜まってしまっ

そしてギリギリになって慌てて片付ける事になるのだ。

でも、今日の僕は少し違うようだ、会社に1時間も前に着いている。

何て素晴らしい事だ

溜まっていた仕事もみるみるうちに片付いていく。

素晴らしい！

そこへ、会社の上司が僕が居る事に気づき、壁に架かっている時計の時間を確認している。

「緒方！どうした！何か遭ったのか！」

余程珍しい事なのか目を丸くして僕に向かって叫んでいる。

確かに珍しい！

しかし、今日の僕は何か違うようだ！その理由は、十分に理解している。

由比の存在が僕を大きく変えている事を。

好きな人ができると、何処から沸いてくるのか解らない不思議な力が出てくるのだ。

単純とかそんな言葉では片付かない不思議な力だ！

事務処理も片付き朝礼を済ました僕は、いつものように由比の居

る営業所に、仕事の連絡を取る。

「プルルル…… ガチャ！ 〇〇〇営業所です」

由比だ！僕は声で直ぐに分った。

「おはようございます！ 緒方です！」

「あ！おはようございます！昨日は、お疲れ様でした！」 由比はいつものように明るかった。

そこへ由比の方から話し始めた。

「緒方さんって電話で話ししてる通り人でした」

「え？」

「話し方とかで優しい感じの人かな？って思っていたから会ってみてやっぱりそうだったって思いましたよ。全然話せなかったけど……」

由比がこんな言葉を言ってくれるとは思わなかった僕は、少し慌ててしまった。

そんな僕に気がついていいいるのか由比はほんの少しでもくすくすと笑っている。

「小手川さんに会ってみたくて行ったのに全然話せなかったよ！山根さんは何かといいタイミングに話かけてくるし…… いったい氣を使ってくれていい人なんだけど……」

「そうよね〜でも、会えたよ」と由比は言いながらまだほんの少し笑っている。

「ま〜そうだけど・・・」

本当は色々話したい事はあるけど、僕は仕事の話を終えて、電話を切ることにした。

それから1〜2ヶ月経っただろう由比とは、いままで道理色々な話をしている。

会社の電話なので長電話は出来ないけど上司や周りの目を盗んでは昨日やっていたドラマの感想やこんな漫画が面白いなんて、たあいもない会話をしていた。

しかし、あれから由比の居る営業所には一度も行っていない。

本当は何度でも足を運びたかったが、僕が由比に会いに来ると周りの人達に気づかれるのが嫌だったからだ。

他にも理由がある、少し前に僕にとって衝撃な事を耳にしたからだ。

由比には恋人がいる。

本当の事なのかは、由比本人に聞ける勇氣も無く、ただ由比ほどの女性に恋人が居ないはずもないとは思っていた。

顔立ちはハッキリしていて目がクリットしていて、誰から見ても可愛く身長も高くスラリとしているし性格も僕が電話で話をしている限りでは明るくて元気をくれるとても良い子だからだ。

由比にとって仕事の話で連絡をしてくる会社の同僚の一人。

もしくは会社の中で周りの人達より少し話し易い仲間の一人の存在だと僕は、思っていたのだ。

しかし僕の予想を裏切るとても嬉しい出来事がおきた。

由比の方から僕の携帯番号を聞いてきたのだ。

由比と仕事の話を終え電話を切ろうとした時だった。

「緒方さん……」  
と言って黙っている

「どうしたの？」

「あの……緒方さんの携帯の番号教えて欲しいんだけど駄目かなあ？」

「僕の？」

「うん」

まさか、由比の方からばくの携帯の番号を聞いてくなんて思いもしていなかったし何か勘違いかと疑いたくなかったが、事実由比は番号を聞いてきている。

僕は、これが電話でのやりとりでよかったと思った。

今の自分を鏡で写したらどれほど間抜けな顔をしていただろう。

僕なりに、平然とした態度を取って由比に番号を教えた。

由比に番号を教えてから、数日ほど経っているのにまだ連絡は着ていない。

当然と言えば当然の事だ。

つい数ヶ月前までは、会社の電話で話をしていて、お互い一度しか会っていない相手だし彼女の方から僕の携帯番号を聞いてきたのも奇跡に近いくらいだ。

僕は教えた日から携帯のチェックを欠かさない。

いつ電話が来るか解らないし、由比の携帯の番号を聞かなかった僕は待つしかないのだ。

仕事とフットサルの練習を終えた僕は、コンビニへ寄りジュースの置いてあるコーナーで何を買おうかと迷っていた。

そこへ携帯が鳴り出した。



携帯の画面を確認すると、見慣れない登録されていない番号が表示されていた。

「小手川さんからだ！」

僕はすぐに分かり電話に出た！

「もしもし。」

「あ！緒方さんですか？」

「うん。」

やっぱり由比だ！

「いま電話して大丈夫？」

「全然大丈夫だよ。」

コンビニの中にいるのにどのくらい話しただろう、僕と由比は会社の電話ではなくお互いの携帯という事もあって1時間近く話しをしていた。

話を終えて僕は、すぐに由比の番号を登録をして、スポーツドリンクを買いコンビニをでた。

### 3章

僕たちは連絡を取り始めて、一ヶ月ほど経とうとしている。

仕事を終えて週2回のフットサルに行く、これが今までの僕の日課だったのだが

今は、由比とほぼ毎日のように携帯でメールや話しをしている。

主な話題は会社が同じという事もあって、会社の事や同僚、上司の話が多いのだが、

変わったのは彼女の事を小手川さんから由比と呼ぶようになっていたし、由比は僕の事を祐にーとよんでいる。

少し前に由比と携帯で話をしていた話題のことで、僕には1歳はなれた姉がいる。

その姉は4年前に結婚をしていて、子供がいるという話をした時の事だ。

勿論、僕はこの歳で叔父さんになっているのだが、姉の子には叔父さんなんて呼ばれたくは無い、だから祐にーと呼ばしていると言う話をしてから由比は「祐にー」と呼ぶようになった。

僕はその時、何で由比までその呼び方なの？と聞くと「私の一年上だから祐にーなの。」と言っていた。

僕は、お互い仕事だったけど由比にメールを送ってみた。

「今日、仕事が終わったら会わない？何か食べに行こう」

すぐに返信はこないと思っていた僕は、仕事が終わるまで由比か

らの連絡を待っていたが案外早く戻ってきた。

「いいですよ。仕事が終わったら連絡待ってるね。」

僕は、心の中で思わずガッツポーズをとった。

今日由比に会える、しかも二人きりでだ。僕は仕事が終わるのがまちどうしかった。

仕事がようやく片付き僕は、会社の上司や同僚に軽く挨拶を済ませ足早に家に帰っていった。

由比には出掛ける支度が出来たら連絡するとメールを送っていたからだ。

本当は、会社からそのまま由比を迎えに行けば良いのだけど、僕は、会社の仕事着で出勤しているし、そのまま会うのは少し抵抗があったからだ。

支度が終わり由比に電話をかけた。

「もしもし!」

由比がでた。

「もしもし遅くなってごめん、今から迎えに行くよ」

「ここまで来てくれるの?」

由比は少し申し訳なさそうに言った

「うん！行くよ！何処で待ち合わせしたらいいかな？」

由比は自分の家の近く目印になるコンビニにの場所を教えてくれた。

そこは僕のよく知っている場所だ、ちょっとした夜景の見えるデパートスポットの近くだからだ。

僕の家からは、東名高速を使えば1時間も掛からない場所だし今から出掛ければ、一般的に言う夕食時は少し過ぎるけど、十分間に合うはずだ。

僕は由比に近くに着いたら電話すると言って電話を切った。

季節は夏になるうとしていた時季だった為、日が沈むのがとても遅くまだうっすらと明るかった。

僕は、車を走らせる。

由比と待ち合わせしているコンビニの近くまで着いた頃、僕は由比の携帯を鳴らしたが、すでにコンビニまで来ていると言っていた。

僕はコンビニの駐車場に車を止めてコンビニの中を見渡した。

そこへ、僕が来た事に気がついたのか、由比はコンビニから出てきて僕の車に向かって歩いてくる。

何となくだけどこちらを見てニコっと笑った気がした。

「久しぶりね。」

「うん、本当に久しぶりだね。」

由比とは、営業所に行った時以来会っていないので、すでに数ヶ月は経っていた。

久しぶりに見る由比はビーズづかいのチュニックにデニムといった格好がとても似合っていた。僕は由比に見惚れてしまっている。

そんな僕を見て由比はどうしたの？って感じで少し首を傾けて笑ってみせた。

僕は照れているのが由比に分からない様に視線をそらした。

由比を乗せてコンビニの駐車場を出て、そこで僕は重大なミスに気がついた。

僕はこの町の事を全く知らない何処にどんな店があるのかも。

食事に誘ったのは僕の方なのだからお店の1つや2つぐらいは決めておくのがあたりまえだと思ったからだ。

今から僕の住む町につく頃にはたいていの店は終わりの時間に近くなってしまっているはずだ。

由比は、美味しいお店があるからそこに行こうと僕を気遣い言ってくれた。

そして僕達はそのお店に行く事にした。

着いた僕たちは車から降りお店の中に入る。

ログハウス風の造りのおしゃれなイタリアンな店だ。

「いらっしやいませ」

ウエイトレスに誘導され椅子に腰掛ける。

「いいお店だね？」

僕が言う

「ここのお店はパスタの種類が多くてどれも凄く美味しいのよ！」  
と由比が言った。

大抵は女の子の方が美味しいお店とか詳しいと思う。

僕がしらな過ぎるのかもしれないけど、友達と外食する時はラーメン屋とかファミレスで済ましてしまっていた。

僕はメニューを開きボンゴレを注文した、由比はお気に入りのパスタがあるらしいニョッキのトマトクリームソースそれを注文していた。

注文したパスタが僕たちの所へ来るにはもう少し時間がかかる。

僕は由比に話しかけた。

「由比は今の仕事をする前は何してたの？」

「洋服屋さんで働いていたの」

「洋服屋さん？」

「そう。コムサってブランド知ってる？」

「コムサ？」僕はブランドの事はまったく知らない、今着ている服だって無名の服だと思う。

気に入った服があればそれを買って着ている。

「そう。そういう名前のブランドがあるの」

「へへ」僕が言う

由比は、僕が全く知らない事に気づき「男の子だもん普通よ」って言っていた。

注文をしたパスタがテーブルに置かれ、僕たちは食べながら会話を楽しんだ。

2時間くらい経っていたら、僕たちは店を出る事にした。

時間は10時をまわっている、本当はまだ由比と別れるのが寂しかったしもっと一緒に居たかったけど、明日もお互い仕事がある為由比を家まで送る事にした。

帰りに由比は

「気を付けて帰ってね！家に着いたら連絡して心配だから・・・」  
と言ってくれた。

僕は車のクラクションを2回ほど鳴らし走りだした。

家に着いた僕は由比にメールを送る。

「今、家に着いたよ！今日はありがとう！」

由比から返信がきた。

「こちらこそありがとう。こんなに遠くまで来てくれて、とても楽しかったわ！」

「また誘うよ！おやすみ。」

「うん！楽しみにしてるね！おやすみなさい。」

今日はなんて充実した一日だったんだろう、由比と一緒に居れた事を思いだしながら、僕は布団に潜り込んだ。

最後のメールをしてからどのくらい時間が経っていたんだろう、そこへ携帯の着信音が鳴った。

僕は半分寝ぼけた状態で携帯の画面を確認すると、由比からのメールが受信されていた。



「由比から？何だろう」僕はメールの内容をみる。

「ごめんなさい。もう寝てるよね？どうしても言っておかなければならない事があるの。」

本当は今日会った時に話そうと思ったんだけど・・・

実は私、今月で会社を退職するの。

前から付き合っていた人と結婚する事になって・・・

だから本当は、祐にーの携帯番号を聞くのも電話を掛けるのも凄く悩んだの、

だけでもう一度会いたかったし、由比は祐にーの事が好きだから今日会えてとても嬉しかった。

突然こんなメールしてごめんね。おやすみなさい」

僕はこのメールを見たが、すぐに返事を送り返す事ができなかった。

## 4章

何時なのか、時計の時間を確認するのも忘れてしまっくらい、僕は真っ暗にした部屋の天井を眺めている。

最後に由比の送ってきたメールの事を考えていたからだ。

もう会わない方がいいし、連絡もしては駄目だと思うのだけど、由比の事をどうしても諦めたくはなかった。

僕は由比の事が好きだし、由比も好きだと言ってくれた。

普通なら何も悩む事もなく、むしろ幸せな事なんだろうと思う。

だけど現実はいさぐさ違った方向に向かってしまった。

由比と僕のあいだに、もう一人加わる事になってしまったのだ。

いや由比と婚約者の間に僕が入り込んだ事の方が正しい。

でも僕は気持ちを抑えるなんて出来ない。

周りの人たちが知ったらきっと止めるだろうし、諦めろと言うに違いないけど、それは無理な事だと思った。

僕が前にビデオショップで借りてきたビデオで、トルストイの復活という映画を観た時に、出てきた言葉を思い出した。

深く愛する事のできるもののみが、また大きな苦悩を味わう事ができる。

その意味が少し理解できる気がした、今までの僕だったらここまで苦しい気持ちはなく簡単に諦めてしまっていたのだと思う。

由比を愛している気持ちが強いほど苦しい気持ちも強いと言う事だと思った。

次の日、僕は会社に行き半分寝ぼけた状態だったが、何とかその日の仕事をこなした。

今日は由比と一度も仕事の連絡を取り合っていない。

上司と同僚に軽く挨拶を済ませ家に帰った僕は、直ぐに由比に電話をした。

「もしもし」

「もしもし由比」

「もう電話くれないと思った？」

由比は少しホッとして言ったように聞こえた。

「どうして？」

「どうしてって・・・」 由比は言葉を詰まらし小さく「昨日のメール」と言った。

「うん。見たよ」

「うん」

それからしばらくお互い黙ったままだ。

そして僕は自分の気持ちを正直に言った。

「俺も由比の事が好きだよ。」

すると由比は、「本当に？」と聞いてきた。

「うん。本当だよ。」　そして続けて「これから会わないか？」  
といった。

何となくこのまま会わなければ、もう会えなくなってしまうような気がしたからだ。

由比は少し黙ってから。

「うん。会いたい」と言った。

僕は、コットンシャツにジーパンといった格好に素早く着替え、家をでて車に乗り込み昨日と同じ待ち合わせしたコンビニへ向かった。

着いた時にはすでに辺りは暗くなっていた。

コンビニに着いた僕は、由比の携帯電話に電話をしてみると、由比はまだ来ていないので少し待つ事にした。

少したってから、由比が僕の車へ向かって歩いてきて車に乗り込む。

そして僕たちは車を海の方へ向かって走らせた。

海岸には大型の船が何隻も停泊している。

ボーボー時々汽笛の音が響いている、この場所は日本から海外へ

海外から日本へと色々な物を運ぶ玄関になっているらしい。

大型船の灯りがとても綺麗で、ちょっとしたクリスマスツリーのように船のマストらしき所から甲板へと無数の電球が飾られている。

その船がよく見える近くに車を止めた。

僕は、何も言わずに由比の手をギュと握り締めると、由比は少し俯き加減でそつと僕の方を見て優しく微笑んだ。

「キスしていい？」僕が聞くと

由比は少しためらいながらこう言った「祐にーの事もっと好きになっちゃうよ、この日の事忘れられなくなる・・・」

「うん。僕もそう思う。」だけど僕は今どうしてもそうしたかったし由比の気持ちをもっと僕の方に向けたかった。

僕はそつと由比の肩に腕を回して引き寄せる。

由比の髪から微かにシャンプーの香りがした。

そつと瞳を閉じるのを確認した僕は、唇を近づけキスをした。

その後、由比は少し照れながら「しちゃった。」と呟き僕の胸にそつと顔を埋めた。

これが、僕と由比との最初のキスだ。

あれから数ヶ月過ぎた僕たちはほぼ毎日のように会っている。

由比は会社を辞めて、今は週に二度近くのコンビニでバイトをしている。

僕はと言うと仕事をして週の二回はフットサルに行き終わった後に由比に会いに行く。

そんな日々が続いていた。

最近が決まって由比の家から車で20分程走り山道を登って行くと、夜景の見えるスポットがある。

そこから見える夜景は、周りにある山がワニが口を大きく開けている形に見えて、町の夜景を食べている様に見えるのだ。

その一番眺めのいいと思われる場所に、僕は車を止めている。

その場所に行くと由比はこう言った。

「ここに来ると私の生まれて育った町が見渡せるのよね。」

「うん。そうだね。」由比が生まれてそして育った町、小さい頃の由比はどんな子だったんだろう？

僕は気になり由比に聞いてみるた。

「私、小さい頃はよく風邪をひいてたの、そうすると必ずお母さんが、おねだりした物を買ってきてくれてたのね、凄く甘えん坊だっ

た私のわがまま聞いて、短大まで行かせてくれたのよ。だから、親は大事にしなきゃ駄目よね。どんな時でも見方になってくれるのは両親しか居ないんだから。」と僕に言った。

由比の家庭は凄く仲が良くて、今でも時々一緒に買い物にで掛けているらしく、そんな暖かな家庭で育った由比は。本当に優しくて思いやりのある子だと思う。

そんな由比が、僕はとても大好きだ。

その後、由比は僕の肩に腕を回しギュツと力を入れ、ため息を吐き「大好き」と呟いた。

しかし、そんな僕たちを直ぐに現実へと引き戻すのだ。

その理由は会っている間にも何度となく、由比の婚約者から電話が掛かってくるからだ。

由比の婚約者は、今は仕事の関係で他の県に行って暮らしていた。

だから僕達はこうして今は一緒に居られている。

だけどいつかはちゃんとケジメを付けなければならないし、時間はいつまでも待ってはくれないからだ。

電話が鳴ると僕的車から少し離れた場所に行き、由比は婚約者と話をして戻ってくる。

それを待つ僕はとても胸が苦しくなり切ない気持ちになる。

けれど僕は由比を責める事は出来る訳がない、由比が結婚をする事を知っているのに自分の気持ちを優先しているからだ。

由比も僕に「ごめんね。」と一言いつて黙って下を向いてしまう。

そんな日が続いている間に何度か会わない方が良いのかと思った事はあるし、いっそうの事、正々堂々と婚約者に全てを打ち明けてケジメを付けようと思った事もあるのだが、結局それは出来なかった。

少し前の事になる、由比と一度だけ別れ話になった事があった。

僕は気持ちを抑える事が出来なくなり、由比にぶつけてしまった時の事で、由比は何も言わずに駄々聞いているしかなかった。

感情をぶつけた後、由比の家の近くに車を止め、「俺たち別れよう」と言い帰ろうとしたが、由比は泣きながら「いや」と言って車から降りようとはしなかった。

僕は強引に降ろすと、由比はその場で泣きながら崩れおち地面にしゃがみこんでしまった。

凄く酷い事をして彼女を苦しめたし、悲しい思いをさせたと思う、ぼくは最低なやつだと心の底から感じた。

その後、結局別れる事が出来なかったのは僕の方だ、もう二度と由比にこんな思いはさせてはいけなないと心に誓った。

いつの間にか秋へと季節も替わり少し肌寒くなってきた頃、由比



の26回目の誕生日に近づいてきた。僕は一人で町に行き由比のプレゼントを探しに出かけた。

シルバーの専門店を見つけた僕は、その店に入り2つ同じネックレスを買った。

一つは僕、もう一つは由比へのプレゼントだ。

たいらな部分に亀の形が彫られている、何処のブランドかは分からないけど。僕はそのネックレスが凄く気に入った。

その理由は鶴は千年亀は万年と言うから、僕達の愛もそのくらい続いて欲しいと気持ちを込めたつもりだ、凄く欲張りだと思うけど。

その後、少し他の店を見て回った僕は少し疲れて近くにあったベシに腰掛ける事にした。

最近ちよつと動いたただけなのに息切れがするし、時々貧血気味なのか、意識がもうろうとする。

フットサルをしている時にも前より疲労感がある。

最近疲れが溜まってきたのか、僕は少し休んで由比のプレゼントを探す事にした。

その夜、由比に電話を掛けた。

プレゼントを渡す日を約束をする為に、しかし電源が切れている為つながらない、僕は察して電話を掛けるのをやめメールを送る事にした。

会いたいのので連絡ください。」「送信」 僕は由比からの連絡を待つ事にした。

## 5章

僕は由比からの連絡を待ったが、その日は連絡が来なかった。

次の日になって僕は朝起きて携帯を確認する、しかしメールも着信履歴もない。

僕は仕事着に着替えて会社に向かった。

そしていつもの様に淡々と仕事をこなし家に帰る。

その間にも、何度かメールが来ているかチェックをしたが。由比からの連絡は無い。

僕は由比からの連絡を待つ事にしてから2日程過ぎた夜、携帯が鳴った。

「もしもし由比」

「もしもし。」

「連絡取れないから心配したんだよ」と少し強めに僕は言った。

すると由比は、婚約者の所に会いに行っていたらしく、本当は前

から決めていた事で、僕に話さなくては思っただけなのだが言えずにいたらしい。

確かに僕たちは、恋人同士なのだけど周りと少し違っている。

由比には、何年か前から付き合いそして結婚を決めた相手がいる。

そこに僕という存在が彼女のちょっとした隙間に入り込み、そして複雑な関係を作り出してしまったのだから。

もしあの時、僕が由比の送ってきたメールを見た時点で先を望まなければ、今の状況はない。

「本当にごめんね」由比は何度も僕に謝っている。

そんな時、電車の音が僕の耳に入り込んできた。

「今何処にいるの？」と由比に聞いてみる。

「今、駅に居てこれから電車に乗って帰る所よ」

僕は由比の乗る電車の時間を聞いて着く時間に間に合うように駅に迎えに行く事にした。

国道1号線を走っていると、ふと少し前に二人でこの道を通った時の事を思い出した。

由比を乗せて始めて僕の住む町に連れて行った時の事だ。

辺りはすっかり暗くなっていて、道路には数台の車と両サイドに電灯が青白く流れるように写っている。

その景色を見ながら、由比は僕の車の助手席に座り外の景色を眺めながらChupa Chupsを舐めていて、時々ニコニコしながら「美味しい」と満足そうに言っている。

そしてその後「電灯がいっぱい並んでいる道路を通ると凄く遠くに来た気分になるわ」と嬉しそうに言っていた。

僕はそんな由比を見てとても愛しく思った。

僕は駅に着き時計台の時間を確認した。

まだ由比が来るまでには少し時間がある。

車から降りて近くにある自動販売機に行き、ダイドーのコーヒーを買う事にした。

コーヒーを買った後、飲みながら車に戻り待つ事にして。

少し待っていると、何人かの乗客が、駅から出てきてその中に由比の姿を見つけた。

由比は僕の車に気づいたらしく走って来た。

「ごめんね。待った？」

「いや、それ程」

そして由比を乗せて車を走らせた。

松の木が並んだ海岸に着いた僕たちは、車を砂浜まで入れて海のギリギリの所で止めた。

波の音が静かに聞こえてくる。

遠くには漁船が漁をしているのか、何隻かの灯りが点いたり消えたりしていて、灯台の灯りが僕たちをリズムよく照らしている。

僕は連絡の取れなかった数日間、とても寂しかった気持ちを伝えようと、由比は婚約者の所へ行つて来た時の話をしてくれた。

由比は婚約者に結婚の時期を延ばして欲しいと頼んだのだが、彼は今になって突然由比の気持ちが変わった事に不信感を抱いたらしく、理由を聞いてきた。

僕は当然の事だと思った、今まで順調に運ばれていて、あと何カ月後か分らないけど。結婚をして夫婦に成ろうとしている相手が突然気持ちが変わったと知ったら、普通ではいられないと思うし、それが最愛の人なら尚更だ。由比も当然理由が別に好きな人ができたからと言えるはずもなく、ただ黙ってしまったらしい。

そして由比は泣きながらこう言った。

「私、婚約者の事も大事だし、祐にーの事も同じくらい大事なの。だから今、扒ぶ事が出来ないの。凄くずるい事だって分かっているのだけど・・・」

僕は自分の気持ちをばかりを考えていて由比が僕以上に苦しんでいる事に気づいてあげられていなかった事に悔やんだ。

「ごめん。由比の気持ちも考えずに」

「ううん。いいの私があがままなだけだから」 由比の肩は小刻みに震えていて時々鼻をすすっていた。

僕はそんな由比を後ろからそっと包み込むように抱きしめた。

その後、僕は週末に泊まりで遊びに行く約束を由比とした。

由比の誕生日は平日だったが、「仕事は、休んじや駄目だよ。」って怒られた事もあって、日にちをずらしてお祝いをする事にした。

二人で始めて横浜に行く事になった。

空は、青々としていて、雲一つなく快晴だ。

僕は箱根を越えて小田原から西湘バイパスにのり、海岸沿いの道で向かった。

海はとても穏やかで時折潮風が車の中に香りを運んできた。

由比は外の景色を眺めながら「海がとても綺麗ね」と言っている。

僕が時々ラツと由比の方へと目をやると、由比は「なに？」つて目で訴えてきた。

「横浜に着いたらまずは何処に行こうか？」

「みなとみらいの辺りにがいいな」

僕は余り道に詳しい方ではないが、今の時代はカーナビというとても便利な物がある為、僕はこの優れた機械に頼りきりだ。

こんな素晴らしい物を考えた人に感謝したいくらいだ。

僕は「OK」と言つてナビを頼りに車を走らせる。

暫く走つて、ようやく横浜の町に入り山下公園を抜け、みなとみらいに差し掛かる。

僕は近くの有料パーキングを探しそこに車を止める事にした。

みなとみらいについた僕たちは、観覧車のある遊園地へと歩いていく事にした、休日はさすがに凄い人で溢れかえっている。

僕たちは手を繋ぎその人込みと同じように歩いていった。

お互い横浜は始めてではないと思うけれど、僕にとっては、何もかもが新鮮に感じられた、手を繋いでいる間も、由比が何かを見つけておどけて笑っている姿も、すべて僕の心の中に刻まれて行く。

この時間がずっと続いて欲しいと心の奥のそこから思った。

由比が赤レンガの方へ行ってみようと言い、僕たちはまだ何も食べていないので赤レンガの中にあるレストランで食事を取る事にした。

食事を楽しんでいる時に由比に最近の僕の顔色が好くない事に気づいていたらしく、聞いてきた。

確かに、僕は最近自分の事で少し不安に思う事がある。

前にも同じような事があったのだけど、自分の体が少しおかしくなっている様な気がしていたし、フットサルも最近は行くのを控えていた。

風邪か何かと思ってても熱は特に無いので病院に行こうと思った事があるのが行っていない。

僕は由比に「気のせいだよ全然いつもと変わらないよ。」と誤魔化した。

しかも今日の僕はとても調子がよく由比に聞かれるまでそんな事も忘れていたくらいだ。

食事を済ませた僕らは、ランドマークタワーや中華街などへ行っ  
て楽しんだ。

空もいつの間にか暗くなりすっかり夜になった横浜は、全く別の顔をしていた。

夜景が凄く綺麗で、見渡す限りネオンに覆われていた。



僕たちは山下公園に行き、ベンチに腰掛け少し離れた場所に見えるベイブリッジを見ながら前に買っておいいたプレゼントを由比に渡した。

由比は嬉しそうに笑い「ありがとう」と言っつてプレゼントの箱をあけ、ネックレスを付けて欲しいと言っつてきたので、僕は由比の首にそつと付けて「凄く似合っつてるよ」と言っつた。

その後由比は、そつと僕の肩に頭を置き僕たちは寄り添うようにずつと夜景を見ていた。

夜の時間も終盤を向かえ横浜を出る事にした僕たちは相南の海岸沿いにあるホテルに泊まる事にした。

今まで何度そうしたいと思っつただろう、だけど由比とはちゃんと泊まりの約束をしてその時にと思っつていたからだ。

この夜、僕は初めて由比を抱いた。

由比を抱くとき僕はすべてが始めてのような感覚になり少し震えてしまっつた。

こんなに愛しい人と一つになれる。

こんなにも幸せで素晴らしい事なんだと思っつた。

僕達は何時間も抱き合いながら、まるで子供の頃に戻っつたようにじゃれあっつていた。

そして暫くして、由比の寢息を隣で感じながら僕も眠る事にした。

## 6章

横浜に泊まりに行つてから3ヶ月が過ぎていた。

最近の僕の状態はさらに悪くなり熱と頭痛に悩まされていた。

少し家から離れた場所に総合病院が在ったので、僕は由比や家族に内緒で行く事にした。

医者に検査を勧められ、検査の終わった後、症状の説明をしていると余りいい返事が返って来ないので病名を聞いてみる事にした。

「何か悪いところでもあつたんですか？」僕が聞くと、医者は不応性貧血と言っていたがまだ、判断できないから少し様子を見ようと言ってきた。

僕が少し不安そうな顔をする。

「大丈夫、ゆっくり治療して行きましょう」と僕の肩をポンポンと叩いた。

僕はその病名が何なのか分からない、ただ病状の進行は個人差がある為はつきりしないらしい。

でも最悪な場合は急性白血病になるという事だ。

その後、注射をしてもらい僕は自宅に帰る事にした。

最近の僕と由比はと言うと、僕がこんな状態の為、会う日が少しずつ減っていた。

由比は僕の様子が少し変だと思い何度か連絡をしてきて、会いたいと言ってきたのだけど最近車で長い距離も走るのは無理になっていたので断るしかなかった。

僕は部屋の中で倒れるように大の字になり、前に二人で話をしていた時の事を僕は思い出した。

いつもの、ワニの夜景のスポットに行った時の事だ。

僕が由比の鼻を軽く噛んだりしてじゃれあっていた時の事だ。「これから先もずっとこうして居られたら良いな。」と僕が言うと、

「私はこの先ずっと祐にーに鼻を噛まれなきゃならないの?」と少しすねた感じで言った。

「ん?じゃー。一緒に居たくないの」と僕が笑って言う。

由比はズルイっと言った感じで「一緒に居たいよ。」と言った。

「一緒に年をとって幾つになってもこうしていたい」と僕が言った。

「うん。絶対に私より先にいなくならないでね。」と由比が少し寂しそうに言った。

その約束は僕にはもう果たせ層にない、由比の辛そうな顔が頭に浮かぶんだ、胸が苦しくて、苦しくて、壊れそうになった。

それから暫くして由比からメールが届いた。

「最近祐にーの気持ちが分からない、私は、もうすぐ彼の所に行かなくちゃならないの。だからその前に、どうしても会いたい」

しかし今の僕にはどうする事も出来なかった、このまま、僕がもし最悪の結果になったとしたら、もう由比とは一緒に居られる事は出来ない。

由比は婚約者と幸せになった方が良くと思うしこのまま僕としても幸せにはなれない。

ほんの少し前までは、僕が由比とずっと一緒に居るのだと強く望んでいた事も、今では無理な事だと感じてしまっているのだ。

僕は知らぬ間に涙が滝のように流れだした、自分の身体を凄く恨んだけど仕方の無い事だ、少し落ち着きを取り戻し由比へとメールを送った。

「ごめん、俺も由比に会いたいけど、今は、どうしても会えない理由があるんだ。由比と一緒に居られた間、凄く幸せだった。絶対に忘れないよ。」

僕はその後、自分の部屋の天井の木目の数を数えていた。

そんな事をしているうちに眠ってしまっていた。

暫くして僕の携帯が鳴っているのに気づき、ふと目が覚めた。

「もしもし」僕が言うすると受話器から泣き声が聞こえてきた、由比からの電話だと僕は直ぐに分かった。

もしもしと続けて僕が言う、

「どうして？」と由比が声を震わせながら言う。

しかし僕は何も言わずに黙っていた。

「会えない理由って何？祐にーに何が遭ったの？」

「ごめん。とにかく会えなくなっただ。」「僕は理由を言えずにこう言うしかなかった。

暫く沈黙が続いて、すると由比は「分かったわ、もうさよならしなきゃ駄目なのよね？私たち・・・」

僕は本当は違うよ、由比の事は大好きだし直ぐにでも会いに行きたいと言いたかったけどグツとこらえ一言だけ「うん」と言っておくしかなかった。

その後、由比は「ありがと。今まで幸せだった、」その後の何か言っていたのだけど、泣いていて余り言葉にならなかった為うまく聞き取れなかった。

その夜、僕は両親に自分の体に何が起きているのか説明をした。

赤血球白血球の血液細胞は骨髓の中で作られていて、血球を作る仕組みが僕の場合はそこに問題があるようで、一生懸命血球を作ってもうまく作れていないらしく、通常よりも数が少ないか質が悪いという事らしい。

また、白血病に移行しやすい事から前白血病状態と呼ぶ事もあるらしい。

僕の説明を聞いた親は、まさか自分の子供がそんな状態だった事に気づかなかつたのが、とてもショックだったらしく母親は冷静ではなく、驚いていたのだけど認めるしかなく、協力してくれると言ってくれた。

そして1週間後僕は会社を辞める事になった。

親が会社に行き、上司には病気の説明をしたけれど、同僚には秘密にもらう事にした。

あれから由比とは一度も連絡を取っていない、きつともう婚約者の元へ往ったと思う、そして結婚をして幸せな家庭を築くのだ。

そう思うと僕の胸は苦しくなるのだけど、初めからこう在るべき事だったと思うしかない。

今は病気の事を考えて直していくしかないのだと思う。

ここ数日は検査の為に、家から病院への往復だけど仕方のない事だと思っていた。

僕はもう車を運転する事が出来ないので、親に運転してもらった

行くかバスで病院まで行っている。

数週間が過ぎて、僕はいつものように家でおとなしくしていると、久しぶりに携帯が鳴り出した。

画面を見ると由比からの電話だ、僕は電話に出る。

「もしもし」僕が言う。

すると「久しぶり」と元気な声で由比が言ってきた。

「うん。久しぶりだね」

「ゆうにー元気だった？」と聞いてきたので、つい僕は余り元気じゃないかなと言ってしまった。

嘘でも元気だよって言わなきゃいけないのについ久しぶりに聞く由比の声にホッとしてしまった。

すると由比は、「何かあったの？」と心配そうに言う。

僕は慌てて「嘘だよ元気だよ。全然何もないよ」と言っただが声のテンションは上がらない。

すると由比は「やっぱり変だ、祐にー私に何か隠してる。本当の事言って。」と聞いてきた。

僕は「何も無いよ」と言う。

言えるはずが無い、今僕が病気に罹っていてもしかすると白血病

になりこの先死んでしまいかも、何て由比に言ったらきつと驚くに決っているし、

これから幸せになる由比に悩みを増やしたくないからだ。

由比は、「どうして。言ってくれないの？私の出来る事なら何でもするから言つて。」と言ってくれた。

僕は心の底から熱いものが込み上げてきて「実は・・・」と言い掛けそうになったのだけど、

「本当に何もなければ心配しないで、由比には幸せになって欲しいんだ」と僕はこう言うしかなかった。

数日前に、由比は実家を出て新しい生活をする為婚約者の住んでる所に行ったらしい。

駅まで両親に付き添ってもらい、「今まで育ててくれてありがとう」と挨拶をして見送ってもらい育った町を離れた。

婚約者と住み始めたのだけれどもどうしても僕の話が気になり電話をしてきたのだと言っていた。

由比は泣きながら「私もうすぐ結婚しちゃうの、だけどやっぱり祐にーの事忘れられないよ」と言っていた。

僕は「もう無理だよ。」としか言えなかった。

本当は映画やドラマのシーンのように由比を迎えに行つて、そしてもう二度と離さないと言って連れ去る。



何て現実はある訳が無くただ、自分の勇気の無さとこれからたどっていく自分の運命に由比をつきあわせる訳にはいかないのだ。

その後、僕は止まらない涙をこらえるしかなかった。

## 7章

僕はふと目が覚めた。

時計の針は午前5時20分を指していた。

僕は窓から外の景色を確認すると、真っ白な世界がそこにあった。

昨日の夜中辺りから雪がずっと降っていたらしい。

空から降ってくる雪を僕はじっと眺めていた。

息を吐くと窓のガラスが曇りそれをトレーナーのすそで拭いた。

テレビを点けてみる、天気予報がやっていてアナウンサーが何年ぶりかの大雪と言っていた。

そこへ母親が僕の部屋に入ってきて「あら起きてたの？外は凄い雪よ。」と言ってきて窓のカーテンを開けた。

「うん。そうみたいだね。」とだけ言った。

「こんなに降ったんじゃ、車は危険だからバスで行った方が良いわね」と母親が言った。

今日は病院に行く日だ。

と言っても余り行く気にはなれなかった。

由比の事を思うと少し胸の辺りがチクリとする。

いつまでもくよくよしていても駄目だと思っただけけど、まだ気持ちの切り替えは出来ていないからだ。

僕はいやいやながらジャンパーとジーパンの格好に着替えて出掛ける準備をしていた。

母親と玄関に行き外に出たのだが予想以上の雪の量で僕は足をとられないようにゆっくりとバス停まで歩く事にした。

バス停に着いてみると、大分遅れているのかまだ来る気配も無かった。

周りを見渡すと、スリップして停まってしまっている車やチェーンをはめている車が、何台か道を塞いでしまっている。

何十分かしてやっとバスが着いた。

僕と母親はバスに乗り込み一番後ろの席に座り窓の外をしてみる。

停まってしまっている車を追い越しゃつこの事で病院までたどり着いた時には昼を少し回っていた。

今日は検査の日だった、病気になってから定期的に検査を受けている。血液細胞の数値を計るためだ。

検査が済んで僕は病室で少し休んでいく事にした。

ベッドで仰向けの状態で天井を眺めて目をつむっていた、時々木の枝や屋根から雪の落ちる音が聞こえてくる。

とても静かだ、すべてが何もなく僕だけになってしまった感じがした。

もし、死んでしまったらこんな感じなのかと考えていた。

いつの事だったか由比と話をしていた時の事を思い出し、もし도ちらかが死んでその事に気づかなかつたらと言う話をしていた。

由比は「そんなのいや。ずっと一緒にいれば気付かないなんて事ないよ。そんな事言わないで。」と言っていた。

「もしもだよ。一緒に居れない事だってあるじゃん。」と僕が言う  
と、

「祐にーは時々そう言って私を困らせるのね。そうゆーところ嫌い。」  
「と言ってすねる。」

「じゃーそうならないようにちゃんと捕まえておかなきゃ」と言  
って由比の手を握ると、

いつもより真剣な顔して「絶対に離さないで。」と強く握り返し

てきた。

「会いたいな。」僕は小さな声で呟いた。

そこへ母親が病室にやって来て、「帰りも時間がかかると思いうから帰ろう」と声を掛けてきたので病院からバスに乗り家に帰る事にした。

それから数日過ぎ、朝方の事だったと思う僕は熱を出して動悸も激しくなりめのまえが真っ白になった。

遠くから母親が僕の名前を呼んでいるような気がしたけど余り覚えていない。

僕が意識が戻った時には既に病室のベッドに寝ていた。

凄く懐かしい香りがしていて、それが僕の大好きだった匂いだと直ぐに気づいた。

顔を横にしてみるとそこには、ある筈の無い寝顔がすーすーと寝息を立てていた。

僕はまだ夢を観ているのか、それとも幻覚。

居る訳が無い由比が椅子に座り、僕のベッドにもたれる様にして眠っている。

僕はそつと手の甲で由比の頬に触れてみた、懐かしい感覚がそこ

にある。

柔らかくて暖かい感触が僕に伝わってくる。

由比は目を覚まし直ぐに僕の方を見て少し震えた声で「祐にー」と言った。

その後、由比の瞳から涙が溢れ流れていく。

「由比どうして。」と僕が聞くと。

「なぜ言ってくれなかったの！私凄く心配したんだから・・・」

「祐にーのばか。ばか。」僕の胸に顔を埋めて声を限りに由比は泣いた。

「ごめん。本当にごめん。」僕は今まで堪えてきたものが全部でてしまったかの様に涙が止まらなくなった。

後から母親に聞いた話だ。

僕は酷く熱にうなされていて、突然痙攣を起こし、何度か名前を呼んだが完全に意識がなくなっていたらしく、慌てて救急車を呼んだらしい。

僕はまる二日意識が戻らなかつたらしく、救急病院に運ばれた後、次の日に母親が着替えを取りにいったん家に戻った時、僕の携帯が鳴っている事に気づき、母親が変わりに電話にでたらしい。

前に由比の存在を少しだけ話した事があつたので覚えていた

らしく直ぐに分かったと言っていた。

そして、由比に僕の病気の話をしてしまった。

話を聞いた由比は、僕の居る病院の場所と病室を聞いて直ぐに来てくれたと言っていた。

だけど由比はもう結婚をしている筈だし、僕の所に来る時に旦那にどんな説明をしたのだろう。

どう考えても由比がここに居る事は現実的に在りえない事だと思う。

だけど今はこうして僕の所に居てくれている。

少し経って先生と看護婦が、僕の病室に来て血圧を測った後にG-CSFの注射をした。

由比はそれをじっと眺めている。

大分落ち着いたのかその後、先生になにやら聞かれて、少し笑いながら応対していた。

「何を聞かれたの？」と僕が聞くと

「ヒミツ。」と言って微笑んだ。

「どうせ、大した事じゃないだろ。」と言って少し不機嫌な顔をすると、

「教えて欲しい？」と余裕なくちぶり言ってきたので、

「別に」と言った。

少し経ってから如何しても気になり、教えてもらったのだが、先生は由比を見てどうやら僕の彼女が奥さんだと思っただけで、話してきたと言っただけだ。

## 終章

暫くして僕の身体は、大分回復していた、と言ってもこの病気とはこれからも付き合っただけで、行かなくてはならない。

いつまた何処で貧血で倒れたり、進行が早くなり白血病や別の病気に罹ってしまうか分からないからだ。

定期的に検査や治療をしていかなければならないのは変わらない。

僕が退院するまで由比はずっと側に居てくれたし、時々家に帰ってはいたのだけど朝には病院へ戻るの繰り返しだ。

僕は少し前に一度だけ由比に聞いてみた、どうしても気になっていた事があった。

「由比。結婚したんだよね？」と聞くと

少し黙って一呼吸控えてから「私彼と結婚するの止めたの。」とだけ言っただけでそれ以上は余り話さなかった。

由比は結婚を止めて僕を扱ってくれた、簡単にできる事ではないと思う。

事実、相手にも大分迷惑掛けたと思うし自分の両親にだって同じだ。

相手の家に由比の両親が誤りに行ったり色々遭ったらしいのだが、詳しくは教えてもらえなかったけど、由比自信も相当な仕打ちがあったに違いない。

こんな僕の為に由比は色んなものをなくしてしまったと思う。

それなのに由比に何もしてあげられないどころか、迷惑ばかり掛けてしまっている。

僕は自分の無力さに、情けなく思った。

一時退院と言う事で、何とか通常の生活とまではいかないけど少しずつ慣らしていく為に、僕は家に戻る事になった。

母親に車の運転をしてもらい、僕と一緒に由比も家に向かった。

家に向かう途中僕は、窓越しから外の風景を眺めていると、前に降っていた雪も全部溶けていつもの景色がそこにあった。

犬の散歩をしている人や小学生位の子供が自転車で何台か連なって走って行く。

母親が去年はバタバタしてあつという間の時間だったと口にした時、僕は次の年に入っていた事に気づいた。

本当に僕にとっても色々ありすぎて、早い一年だったと思う。



ルームミラー越しにチラッと由比を見て、

「由比ちゃん祐次の為に本当に迷惑ばかり掛けてごめんなさいね。」  
と母親が話しかけると、

「いえ。私がそうしたいと思ってしてるので」と言って優しく笑う。

「ありがとうね」母親は何度も由比にお礼を言っていた。

それを僕は黙って聞いていた。

家に着いて由比を僕の部屋へと連れて行った。

僕の家に来たのは初めてで、勿論この部屋に入る事だって由比にとっては初めての事だった。

今まで一緒にいた頃だって僕の家には一度も呼んだ事が無いからだ。

なのに今こうして由比が僕の部屋に居るのは、何だか不思議なことだと感じてしまう。

僕たちはソファアに並ぶように腰掛けてMDコンポの電源を入れる、前に聴き途中だったMrChildrenの歌が流れ始めた。

僕が車の中で流していたアルバムと同じだった事に由比は気づき、一緒に居る時この曲よく流れてたよね」と言っていた。

「うん。」と言って僕たちの思い出の曲、と言うつもりだったがその先は止めておく事にした。

その後、僕は久しぶりにワニの形をした夜景のスポットに行きたいと由比に頼んだ。

由比は分かったと言って僕をその場所に連れて行ってくれた。

久しぶりに来たこの場所は、夕時だった為かワニの夜景が見えない代わりに、町と少し遠めに駿河湾がはつきりと見え真っ赤な夕日ですべてを赤く染めている。

また、こうして二人でこの場所にこれた事は幸せな事だと思う、もう二度と来る事のない場所だと思っていたからだ。

こんな身体で僕は如何なってしまうか分からない。

由比に一杯負担を掛けてしまうかも知れないし、いつまで一緒に居てあげられるか分からないと思うと余計苦しくなる。

そう思うと胸が熱くなり涙が溢れてきた。

僕は、由比をギュッと抱きしめ止まらなくなった涙を隠した。

「どうしてこんな僕の為に。これから一杯迷惑掛けちゃうかも知れないんだよ。」

由比は優しく微笑み。

「私が祐にーを愛してるから。」

僕は涙が止まらず、ただ泣きつづけるだけでなかなか言葉になら

なかった。

「僕は、由比を幸せにしてあげられるかな？」

「いまの私は十分幸せだよ。だから泣かないで・・・」

「あなたが側に居てくれるだけで私は世界一幸せだから・・・。」

「ありがとう。」

「僕は絶対、今以上に君を幸せにする・・・そして二度と離さない」

END

最後まで読んでいただき、ありがとうございます

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4330d/>

---

君に会えて

2011年1月26日03時15分発行